『サチール・メニッペ』研究　－序－

菅 波 和 子

16世紀後半のフランスを舞台に繰り広げられた血みどろの宗教戦争は、同胞間のまさに骨肉相食む争いであったが、その争いもようやく終熄の兆を見せ始めた1594年春に世に出されたのが、戦闘的諷刺文学の白眉ともいわれる『サチール・メニッペ』である。

この作品については、文学史などを繙くたびに関心をそそられながらも、刊本が入手しにくいせいで、というか積極的に探し求めようとしなかったせいで、長いこと読めずに過してきたが、最近になってどうにか幾つかの版を手に入れることができた。

そこでようやく『サチール・メニッペ』研究に取りかかった次第だが、<序>と銘打った本稿では、作品そのものの思想的、文学的内容の分析には、まだ入れないだろう。作品の成立背景や、作者、出版経緯、表題の意味などについて触れるにとどまるが、その過程でせめて本文の冒頭に付された二種類の«刊行者の辞»の面白さぐらいは伝えることにしたい。

時代背景　『サチール・メニッペ』とはラテンの作家ウァロの同題の作品のように散文と韻文から成るというか、処々に詩句が織りこまれた散文体の作品で、1593年初頭からパリで開かれた<リーグ派(神聖同盟)>主催の<三部会>の模様を、容赦なく諷刺し、戯画化することを目論んだものである。著者名は勿論伏せられていたが、いわゆる<ポリチック派>の立場からの<リーグ派>批判というポレミックな書であることは歴然としている。

93年の<三部会>は、アンリⅢ世没後(1589.8.2)、王位に就いたブルボン家出身のアンリⅣ世を<異端者>であることを理由に仏国王とは認めようとしないカトリック過激派が、「では代わりに誰に王位継承権を認めるか」について討議しようとマイエンヌ公を頭に戴いて開催したものである。このマイエンヌ公こそ、88年暮に、アンリⅢ世の放った刺客の手で殺された、かつての<リーグ派>の首領アンリ・ドゥ・ギーズ、及びその翌日に処刑されたルイ・ドゥ・ギーズ枢機卿の末弟シャルル・ドゥ・ギーズである。

89年の3月以来、彼は<王国総代理官(lieutenant général du roi)>の地位にあって、アンリⅣ世軍と対峙しながら首都パリを掌握していたが、シャルルマーニュにつながる由緒ある血筋のロレーヌ家の一員であることを理由に(ギーズ家はロレーヌ家の分家)、王位継承を要求している一人でもあった。

ロレーヌ家の内部には彼以外にも数名、同様な要求を掲げている人物がいたし、ア

ンリⅡ世とカトリーヌ・ドゥ・メディシスの娘エリザベートを妃にむかえ(この時期には既に他界していた)、その間に王女のあるスペイン国王フェリペⅡ世もそうなれば、サヴォワ公もヌムール公もという具合に、主だった王位要求者だけでも、当時、9名はいたのである[1]。

カトリックとユグノーの対決として展開してきた宗教戦争に、さらに王位継承問題が絡んできたのは、84年6月に王弟アンジュー公(元アランソン公)が病死し、子供のいないアンリⅢ世の後は、ヴァロワ王朝の断絶が確定的という見通しになってからである。そうなると、従来の法に照らして正当な後継者といえるのは、ブルボン家の当主、アンリ・ドゥ・ナヴァールを措いていないはずだが、このアンリは何せユグノーの総大将なのだ。<ローマ教会の長女>であると幾世紀にもわたって、自他共に認めてきたフランスの王座に<異端者>がのぼるようなことがあって良いものだろうか、というのが大方の国民感情である。

アンリⅢ世の再三の要請にもかかわらず、彼が回宗を拒んだことから、事態はますます深刻化し、紛糾していった。84年の大晦日には、スペインとリーグ派の間で<ジョワンヴィル協定>が結ばれ、いざとなれば<異端者>のアンリではなく、彼の叔父シャルル・ドゥ・ブルボン枢機卿を王位に推挙しようという密約さえ交わされた。その方針は翌85年3月30日付けの<ペロンヌ宣言>でも再確認された[2]。ピカルディーにあるペロンヌという町は、1576年の第一回<神聖同盟>の発祥の地でもある。

故アンリ・ドゥ・ギーズの下で結成されたその第一回目の<神聖同盟=リーグ派>(地域的神聖同盟の発生はシャルルⅨ世在位の頃の60年代末にまで遡るともいわれている)は、途中で、いわばアンリⅢ世に乗っとられた恰好で翌年には解体してしまったが、85年には再び息をふき返し、歴史家リヴェの表現を借りるなら、「地の底から湧き起こった大衆運動」[3]となって拡がっていったのである。

それ以後、第8次宗教戦争に突入し、いわゆる<3人のアンリ>の熾烈な戦いが打ち続くわけだが、その過程で<リーグ派>内の過激派、殊に<十六区総代会>(les Seize)という形で結集したパリの急進的市民勢力は目を見張るばかりに強大になっていった。それゆえ<リーグ派>の首領アンリ・ドゥ・ギーズでさえ、時に不安と警戒心を抱かされたほどである。彼らは単にカトリック護持派であるだけではなく、王政や貴族に対する不満をも募らせ、市民の自由や権利、都市の自治権などを要求するようになっていったからだ[4]。

この市民勢力は、ついに88年5月には民衆蜂起ともいえる<バリケード事件>を引起こし、アンリⅢ世を首都から追放し、代わりにアンリ・ドゥ・ギーズを迎え入れたのである。この異常事態を打開するために、さしも優柔不断なアンリⅢ世も10月には、ブロワで<三部会>を開催せざるを得なくなったが、周知の通り、88年の<三部会>はアンリ・ドゥ・ギーズの暗殺で幕を閉じたのである。

暗殺というこの不祥事は、国王に対するパリ市民の怒りの焔にさらに油を注ぐ結果

を招いてしまった。そのような状況に対処すべく、アンリⅢ世は89年春、アンリ・ドゥ・ナヴァールと和平を結んだが、8月1日、サン・クルーで、自らを<神の正義の実現のために選ばれた器>と思い込んだ、22、3才の血気にはやるジャコバン会の修道士ジャック・クレマンに襲われ、翌日敢なくも絶命したのである。これはフランス史上初めての国王に対する弑逆事件で[5]、<不当な国王に対する叛逆は正当な行為として許される>という考えが、今や一般民衆にも自明の理のように受け入れられていたことを物語るものである。

瀕死のアンリⅢ世の遺言で、アンリ・ドゥ・ナヴァールが直ちにアンリⅣ世として即位したが、ユグノーである新王に対する不信と反感は根強く、かねての密約通り<リーグ派>は11月30日に、ブルボン枢機卿をシャルルⅩ世として王位に就けた。だがこの王は、半年後の90年5月には他界する運命にあった。聖職者ゆえ嫡子がないことは初めから分かっていたはずだが、この死によりまたもや、かまびすしく<王位継承>論争がむしかえされ、前述のごとく王座への多数の候補者が現れてきたのである。

フランスの王位継承は幾世紀にもわたって<サリカ法>に則って行われてきたが、女子には継承権がなく、国王直系の嫡出の男子、それがない場合には血筋のもっとも近い家系の男子で相続していくことが明文化されたのは1316(1317?)年になってからである。だがそこには、<国王はカトリックでなければならない>とは記されていない。カトリックではない国王の出現など予想だにされない時代の法であってみれば当然のことだが、となると<今や無条件に、このサリカ法だけで王位継承者を決定してよいものだろうか>という問いが、様々な思惑や利害から提起されたのである。

<リーグ派>は既に1576年のブロワの<三部会>の頃から、王国基本法の第一箇条として<仏国王はカトリックでなければならぬ>と規定し、それを従来のサリカ法に勝る効力を持つものとすべきであると主張してきた。だが、<では、王国基本法の内容とはどのようなものにしたらよいのか?新たな規定を設けるとしたら、それはどうあるべきなのか>という点では、<リーグ派>内部はもとより、<ユグノー派>や<ポリチック派>の内部でも諸説紛々としており、アンリⅣ世の即位後でさえ結着はついていなかった、というか議論は一層もつれにもつれていった。だが、ここではその詳細に立ち入ることは控えたい[6]。

89年9月のアルクの戦い、翌年3月のイヴリの戦いで勝利を収めたアンリⅣ世軍は、その勢いに乗じて、依然として<十六区総代会>の支配下にあった首都パリの包囲に5月初めから取りかかったが、苦戦を強いられ、ついに秋には兵を引きあげざるを得なくなった。スペイン王の命を受けたパルマ公アレッサンドロ・ファルネーゼの軍が、9月初めに、パリの<リーグ派>支援に大挙駆けつけてきたからである。

スペインの横暴に対して反感を抱き、多少なりともアンリⅣ世に理解と好意を示してきた教皇シクストゥスⅤ世が8月27日に世を去ったことも、仏国王の形勢に不利に作用した。その後を継いだウルバヌスⅦ世の在位が数ヶ月で終ると、12月16日、新た

に教皇座に選ばれたのは、スペイン王の傀儡でしかないグレゴリウスXⅣ世だった。この教皇も翌91年10月16日には亡くなってしまうので、在位はきっかり10ヶ月間にすぎないが、ヴァチカンの権威を背後に翳しての、この間のスペインの軍事的、政治的フランスへの介入はますます露骨になっていった。フランスの<カトリック派>支援を錦の御旗に立てたフェリペⅡ世の真の狙いは、ヴァロワ家の血を引くわが娘イサベラをフランスの王位に就けることだった。そうなればネーデルラントからイベリア半島まで地続きで支配できるようになる。となると、マイエンヌ公を始めとするギーズ・ロレーヌ一族も警戒心を強めざるを得ない。他方、軍事的、資金的にスペインから多大の援助を受け、絶えず煽りたてられているパリの急進派<十六区総代会>とマイエンヌ公との間の亀裂は、拡がる一方だった。クーデタにも発展しかねないこのパリ市民勢力をいかにして抑え込むかに、91年、92年のマイエンヌ公はきりきり舞をさせられた。彼らこそ、まさに<リーグ派>にとって獅子身中の虫だった。一方ではフェリペⅡ世との、もう一方ではアンリⅣ世との折衝を続けながら、事態収拾への道を探ることに懸命に奔走したマイエンヌ公ではあったが、身内のギーズ・ロレーヌ家内にも王位継承権を要求する対立候補を複数に抱えており、大方の貴族からは離反され、彼の不人気はいかんともし難く、92年後半にはほとんど孤立無援の状態に立たされていた。

そうした中で、王位継承者を決定するための<三部会>開催要求の声が、スペインに後押しされた<十六区総代会>から高まってきたのである。どうみても、この頃のマイエンヌ公が、本気で王位継承を望んでいたとは思えない。せめても<王国総代理官>の地位だけは死守したいと考えていたようだ。

「リーグ派の首領は国王の代わりを務められるとは思っていたが、三部会を召集するという考えには長い間、反感を示してきた。開催地として、パリ、ムーラン、オルレアンを次々に指定したが、いつでも延期の口実を作るのだった。スペイン人たちに促がされ、1592年6月には、ランスを選ぶことに決意した。…」[7]

だが、<三部会>開催に、かくも気乗り薄なマイエンヌ公が、ついに重い腰をあげるには、92年12月3日のパルマ公、アレッサンドロ・ファルネーゼの死を待たねばならなかった。これで、スペインの圧力に屈することなく、首都パリで堂々と<三部会>を開けるというわけだ。

「彼はスペインの後見から開放され、自由に筆頭格をつとめられると思った。三部会を牛耳ることになるのは(少くとも自分ではそう信じていたのだが)、彼だった。」[8]

紆余曲折の末、<パリ三部会>がついに開催されたのが93年1月26日、国王不在の

王宮ルーヴルにおいてだった。それに対して、アンリIV世は当然抗議の意を表し、<三部会>召集権は国王にしかなく、「«その会議に赴こうとしている者にであれ、戻ってくる者にであれ、または人を派遣しようとしている者にであれ、通行を認めたり、滞在の世話をしたり、援助の手を差し伸べることは»、«君主に対する大逆罪の確信犯»の罪に問われよう」[9]と警告を発した(93.1.29)。

それゆえ全国各地から400名以上の代表者が見込まれていたというのに、実際には128名の参加者しかなかった。49名の聖職者、24名の貴族、55名の第三身分の代表者という内訳である[10]。よって、「全パリ、全フランスがこの三部会を笑いものにするように」[11]なったのである。

ともあれ<パリ三部会>は93年中、続いたが、7月25日には、アンリIV世がサン・ドゥニ教会でついにカトリックに回宗し、数日後にマイエンヌ公と休戦協停を結んでからは、<リーグ派>内にも動揺が生じ、いつとはなく解散していったのである。

作者たち[12] <パリ三部会>が開催されて間もなくの頃、オルフェーヴル河岸に面したある家では数名が集まり、何やら熱心にある計画を練っていた。奇しくもこの同じ家で、約半世期後には、古典派の代表的な『サチール』作者ボワロー(1636-1711)が産ぶ声をあげることになるのだが、この時の住人は、サント・シャペルの参事会員でパリ最高法院の評定官(Conseiller clerc)、ジャック・ジヨ(Jacques Gillot,1550頃-1619)だった。集まってきていたのは、いずれも彼と政治的見解をともにする、いわゆる<ポリチック派>の仲間で、彼らは折しも開催中の<パリ三部会>を徹底的に揶揄、嘲笑するための、何か気の利いた作品を共同で執筆しようと討議していたのである。

彼ら皆を知っていたというジャック=オーギュスト・ドゥ・トゥーの証言によれば、この計画を思いつき、最初の草案を作成したのはノートル・ダムとサント・シャペルの参事会員ピエール・ルロワ(Pierre Leroy,? - ?)だった。やがて出来上がった作品の中の「ペルヴェ枢機卿の演説」(前半はラテン語、後半はフランス語で書かれている)を執筆したと思われるフロラン・クレチアン(Florent Chrestien,1541-1596)は、アンリ・エチエンヌに教えを受けたギリシア語学者で、師と同じくカルヴァン派の信者、そして若き日のアンリ・ドゥ・ナヴァールの家庭教師でもあった。

「リヨン大司教」と「パリ大学総長ローズの演説」を担当したのは、詩人で法曹家のニコラ・ラパン(Nicolas Rapin,1540頃-1608)であろう。全体の構想を考え、まとめあげたのは彼だという説もある。彼は「好ましい性格の持主だったので、審美眼のある人たちは彼について、古典の詩人の秀れた表現をうまく仏訳する才能を備えた唯一人の人物だと言っていた。」[13]

彼と共に作品中の韻文を受けもったとされるのは、ラテン語学者のジャン・パスラ(Jean Passerat,1515-1572)である。彼は<聖バルテルミーの虐殺>で命を落としたラムスことピエール・ドゥ・ラ・ラメ(Ramus ou Pierre de La Ramée,1515-1572)の跡を継いで、

王立教授団で雄弁術の講座を担当し、学者としての名声を馳せた人物でもある。

「マイエンヌ公の演説」及び第三身分の代表者で<ポリチック派>の代弁者ともいえる「ドーブレの演説」(これこそ全体の白眉ともいわれ、分量的にも全体の1/3をしめている)を執筆したのはピエール・ピトゥー(Pierre Pithou,1539-1596)であろう。ピトゥ家からは数多くの法曹家が輩出しているが[14]、彼もまたキュジャスの下で法律を学び、パリ高等法院を振り出しに様々な要職に就いた。若い頃はカルヴァン派の信者でスイスへの亡命を余儀なくされた時期もあったし、聖バルテルミーの暴動の折りには屋根の上に逃げて、辛うじて助かった。それから間もなくして(1573年)、カトリックに回宗した。『サチール・メニッペ』を上梓したのと同年には、彼のガリカニスム宣言ともいうべき『フランス教会の諸自由について』(*Recueil des libertés de l'église gallicane*)も著わしている。彼の誠実さ、識見、学問への造詣の深さをよく知るドゥ・トゥーは、「彼を今世紀最大の人物の一人と見なさざるを得ない」[15]と称えている。

以上の6名が『サチール・メニッペ』の作者だが、多分フロラン・クレチアンは別として、彼らの誰も貴族出身ではなかった[16]。

出版経緯　彼らの作品の初版は1594年の春先きにトゥールのジャメ・メタイエ書店から出された。もっと正確にいえば、シャルトルでのアンリⅣ世の戴冠式(2月27日)の際に、原稿が出版屋に引渡され、王のパリ入城(3月22日)直前に完成したのである[17]。

勿論、作者の名は伏せられていた。初版に付された、恐らくは作者自身の手になると思われる«刊行者の辞»によれば、著者は<三部会>開催中のパリに滞在していたイタリア人貴族で、彼はその模様を、自分の仕えるフィレンツェ公に伝えようとイタリア語で記録を作成したのだが、やがて帰国する途中で自分の雇った馬丁にそれを鞄ごと盗まれてしまった。しかし、程なくしてその馬丁が逮捕されたことから、くだんの文書も人目に触れ、仏訳された後は、次々と人手に渡り、やがて刊行者である自分が入手するに至ったという[18]。

だが第六版から付された«刊行者の第二の辞»では上記の説明を全面的に覆えし、<かくも見事な文体と表現を備えた作品がイタリア語からの翻訳であろう筈はない>、との確信からパリ中を探しまわった末、ついに著者のいとこと称する男に巡りあえ、人と会いたがらない本人に代わって、執筆の経緯を語ってもらったという。

それによれば著者は

> 「イタリア〔Italie〕ではなくアレティー〔Alethie,<真理の国>の意でフランスをさす〕(前者からはかなり遠い)の出で、エルテール〔Eleuthere,<自由の町>の意〕と呼ばれる、パリ族が住みついて、建設した小さな町の生まれである。……名はアグノスト〔Agnoste,<見知らぬ者>の意〕氏で、ミゾケーヌ〔Misoquenes,<新奇なも

のを毛嫌いする保守主義者>の意〕一族の出、心正しく、決して人を欺いたりしない貴族で、トリエントの公会議〔Concile de Trente〕より葡萄酒会議〔Concile de vin〕を好むという御仁である。……両眼の間に鼻があり、口もとには歯も髭もあり、しょっちゅう袖口で洟をかむ〔「ラブレー」Ⅰ－11を見よ〕偉大な小男である。現在は、<良き時代通り>〔rue du Bon Temps〕の<富農>〔Riche Laboureur,パリ民衆の困窮を目の前にしての、<リーグ派>に対する皮肉〕という看板が揚げられたあたりに住んでいるが、カルメラ修道会〔Carmes,詩句の意の<carmina>との懸詞〕には年中、散歩にでかける」[19]

ということだ。読者はまたしても目つぶしを喰らわされたようなものである。当時の読者が、どの程度、作者(たち)について知っていたのかは、よく分からない。作者たちの名を明らかにしているのは、前述の通りドゥ・トゥーであり、もう一人は1651年末に70才で亡くなったピエール・デュ・ピュイ(Pierre du Puy)である。この二人ともN・ラパンやP・ピトゥーをよく知っていた。デュ・ピュイはコンセイユ・デタの参議(conseiller d'Etat)で、王立図書館管理人でもあったが[20]、『サチール・メニッペ』について最初の注解作業を行った人物といえる。(彼の「注解版」は没後、1664年に初めて出版された。)作者たちの仕事の分担について伝えてくれたのも彼だった。作者については16世紀の読者も恐らく、幾らかの見当はついていたであろうと思われるが……

ところで、上で触れた二種類の«刊行者の辞»はどうみても作品の重要な一部を構成しており、出版屋が後から付したものとは受けとれないが、それはそれとして実際に出版業務を担当したジャメ・メタイエの素性については幾分なりと知っておく必要があろう。

彼は王室の公文書の刊行を主たる任務とする、いわゆる<王室御用達印刷屋>(Imprimeur du roi)の一人で[21]、1588年の<三部会>の際には、他の何人かの同業者と共にアンリⅢ世に随行して、開催地のブロワに赴いたのであった。ところが年末の<ギーズ公暗殺事件>で、政局がかつてない混迷状態に陥り、パリが完全にリーグ派に制圧されてしまったため、戻るに戻れず、パリの同業者と誘い合わせてトゥールに印刷所を構える決意をしたのである。

以後、1594年春の開城まで、パリの方の出版界は<十六区総代会>の徹底監視下に置かれ、その間トゥールは、王党派の第一の牙城の役を果たしたのであった。政治的、文化的に、まさにパリに次ぐ第二の都とさえいえた。J.メタイエも手広くカトリック関係の書物や文書を扱ってきた出版屋ではあったが、<リーグ派>には批判的で、アンリⅢ世が暗殺されて後は、新王アンリⅣ世の支持にまわり、王党派側の情宣活動に積極的に加担したのである。

ある調査によれば、「1589年から1594年にかけてトゥールで出版された文献の52%

以上－その2/3は公文書か時事文書である－は、このようなパリから移って来た印刷屋で出された」[22]のだった。

となると、アンリIV世支援にかくも役立つことになる『サチール・メニッペ』の出版に、J.メタイエが係わったのもなるほどと肯けるのである。

この作品は初めから『サチール・メニッペ』と題されていたわけではない。初版の表題は、『スペインの万能薬の効力、及び<リーグ派>の指導者たちによって1593年2月10日に召集された<パリ三部会>の報告抄』[23]というものだった。<2月10日>という日付けに、それほどこだわる必要はあるまい。アンリIII世、アンリIV世治世下のフランスについて克明な記録を残したピエール・ドゥ・レトワール(Pierre de l'Estoile)でさえ、この<2月10日>に特別な出来事があったとは記していないのだから……

発行年がなぜか1593年と記された版も幾つかあるが、本文の内容から判断しても1593年刊ということはあり得ない。1594年初頭の出来事にまで言及しているからだ。

但し、前述の通り、この作品の‹草案›は‹パリ三部会›が始まって間もなくに作られており、いかなる経路を辿ってか、その‹手書きのコピー›が既に93年春からひそかに世に出回っていたのは事実である[24]。表題は『1593年2月10日、パリで召集された‹三部会›の報告抄及びその精神』[25]というもので、全体の構成は1594年の初版とほぼ同じだが、大幅な加筆、修正がほどこされた後者と較べると1/3以下の規模でしかない。韻文もいまだ全く含まれていず、リーグ派の大立者たちの戯画的描写にしても、どちらかというと平板、画一的で個性に乏しい。実際、94年版になると、格段に豊かな文学性を帯び、もはや単なる時局諷刺の文書ではなくなるのだ。

『スペインの万能薬の効力…』と題されたこの94年版は刊行されるや、ポリチック派ばかりか、ユグノー派、リーグ派からも数多くの読者を得て、ドゥ・トゥーの証言では、「宗教戦争の全期間を通じて、両陣営のすぐれた人たちから、これほど称賛され、受けいれられた書物はなかった」[26]という。«刊行者の第二の辞»によれば、作品の価値を充分に理解していなかったためトゥールでの初版は700から800部に抑えたが、その後パリに戻ってみると、皆が躍起になって求めようとしていることが分かり、三週間で4刷を出した上、直ちに第5刷目に取りかかったほどで、しかも海賊版まで大量に出まわっていたという[27]。

この人気の秘密はどこにあったのだろう？ 刊行者、というか著者の一人が、ひそかな自負をこめて記しているように、第一にはこれが「いともフランス的、洗練された作品で、フランスのあらゆる事情や、他の人以上に注目されている人たちの性質について熟知していることを示しており」、「優れた精神の持主に、かくも喜びと満足をもたらしてくれた作品」[28]だからだが、楽しい読物とはいえ、ユマニストとしての博識を相当に備え、政局の内情にも通じている読者でなければ、作者の諷刺の意図を充分に

汲みとることはできなかったであろう。前述の通り、半世紀後には、はや注解書が必要になったほどの作品なのだから。

‹草稿›という不完全な形であったにせよ、そのコピーが前年からひそかに世間に出まわっていたことも、前評判を煽る大きな要因となったにちがいない。

しかも、これまで‹リーグ派›だった人々からさえ愛読されたということだが、この時期の‹リーグ派›は既に末期的症状を呈しており、打つ手のない敗北ムードに色濃く包まれていた。(マイエンヌ公が、ついにアンリⅣ世に屈服するのは翌95年末のことだが。) 打ち続く戦乱に疲れ果て、兵糧攻めや経済的困窮に、もはや堪えられなくなったパリ民衆の‹リーグ派›に対する不満は‹パリ三部会›が始まった頃から募る一方だったが、殊に93年夏に国王が回宗してからは‹リーグ派›から離れようとする人々が増えていった。国王の信仰問題が解決した以上、正当な王位継承者に抵抗する理由は何もなかったからだ。言うなればこの作品は‹ポリチック派›流の和平提案が充分に受けいれられる下地の固まったところで世に出された、まさに時宜を得た出版物だったといえる。

サチール・メニッペ 『スペインの万能薬の効力、及び‹リーグ派›の……』という初版の表題に、さらに『サチール・メニッペ、もしくはスペインの万能薬の効力、……』という表題が冠されるようになったのは«刊行者の第二の辞»が付された第6版からである。この版の発行年は94年となっているが、‹刊行者›が94年12月27日のジャン・シャテルによるアンリⅣ世暗殺未遂事件、及びそれに続いて出された‹イエズス会追放令›(12月29日)にまで言及しているところから見て[29]、実際に市場に出まわったのは95年になってからであろうと思われる。

まずは『スペインの万能薬の効力』－ *La vertu du catholicon d'Espagne*〔‹カトリコン›という語は勿論、‹カトリシテ›catholicitéとの掛けことばになっている〕－という原題の意義について考えてみるべきだろうが、それについては別の機会に取りあげることにして、ここでは、今日世に流布している『サチール・メニッペ』という第2の－‹草稿›から数えれば第3の－表題にこめられた意義を探っていくことにしたい。

なぜ『サチール…』と題を改めたのかという問いに、作者のいとこと称する人物は次のように答えている。

> 「そんな質問は無智な人間でなきゃしないだろうよ。学芸に精通している者なら誰だって知っていることだが、‹サチール›という語は、単に誰かの社会的、個人的悪徳をあげつらおうという中傷の詩をさすのではない。ルキリウスやホラチウス、ユウェナリス、ペルシウスなどが良い例だ。それはまた色んな事柄や題材も入っていれば、塩漬けの牛タンをアントルメの料理として出すように、散文と韻文が交互に混じったあらゆる類の文章をもさしている。ウァロが言うには、昔は

様々な野菜や肉を詰めたお菓子やファルス〔肉料理への詰め物/笑劇〕のたぐいをこう呼んでいたそうだ。でもこの名称はギリシア人から出てきていると思うな。彼らは公けのお祭りの時に、サチュロスに扮した男たちを屋台の上に乗っけたものだ。サチュロスとは森にいる馬鹿騒ぎが好きな、浮かれた半神と考えられているが、そんなやつを生きたままスィラに差し出したこともあったし、聖アントニウスにも姿を現わしたそうだ。で、そんな風に変装し、裸に色を塗りたくられた男たちは、お咎めも受けずに皆を槍玉にあげ、嘲笑してよかったのだ。昔は彼らだけにして、その悪口雑言の詩を言わせたものだ。誰彼となく笑い物にし、けなすことだけが主題でね。それから彼らを役者たちの中に入れてやると、役者の方も民衆を笑わせようと芝居に加えてやるのだった。だが結局はもっと真面目臭って、深刻振ったローマ人になると彼らを全く舞台から追い出し、代りに物真似やパントマイムを取入れたってわけだ。とはいえ器用な詩人たちの方は‹サチール›を用いて、人をあげつらうのが好きなおのが精神を満足させたのだ。そういった精神を、ある人たちは至高の善と心得ているし、パリ族の住むわが国でも、気の利いた言葉や当意即妙の嘲けりを諦めるぐらいなら、良き友を失なう方がましだと思っている手合いはいくらもいる。だから、この小論に‹サチール›という名を付けたのも理由のないことではない。散文で書かれているとはいえ、あけっ広げで辛辣、しかもこの中でやっつけられていると思う人たちの意識の底に喰いこむような皮肉がたっぷり込められているのだから。彼らには本当のことを言ってやってるのだがね。それに一方では、正しい道からこれっぽちも外れなかったと言いきれるような、真っすぐな心の持主を笑いころげさせてもいる。‹メニッペ›という形容詞も目新しいものではない。クィンティリアヌスや聖アウグスティヌスはウァロをもっとも学識豊かなローマ人と呼んでいるが1600年も前にそのウァロも‹メニッペ›と名付けて‹サチール›を書いている。マクロビウスによると、それは‹キニク›〔犬儒派風〕とも‹メニップス›とも呼ばれたそうだが、ウァロは犬儒派の哲学者メニッポスから、そう名付けたんだな。メニッポスは彼よりも前にそんな風なことをやってのけたってわけだ。ぴりっとした冷笑もあれば、気の利いたせりふをふんだんに織りまぜた嘲弄もあるって具合で、当時の腐りはてた輩を笑いとばし、憤慨させたんだよ。で、ウァロはそれに倣って、散文で同じことをやったわけだ。それ以後にはペトロニウス・アルビテルもやっているし、ギリシア語ではルキアヌスがいる。その後はアプレウス。当代ではあのラブレーだ、……»[30]

どうやら長い引用になってしまったが、‹サチール›についての要諦は、これでほぼ言い尽くされていると言えよう。‹サチリック›な言論、作品は、いつの時代、どこの国にも、存在したわけで、『16世紀フランスの‹サチール›、もしくは戦闘文学』と題し

た全2巻、計700ページにも及ばんとする労作(1886)を残した前世紀の碩学、シャルル・レニアンにしても[31]、『痴愚女神礼賛』の著者から始めて、一見、‹サチール›作家とは言えそうにない作家、例えば、カルヴァンやロンサール、モンテーニュまで取りあげた上で、この時代の‹サチール›の諸相を浮彫りにしようとしたのである。

ところで、この‹satyre/satire›というフランス語が生れたのは14世紀後半のことと言われているが[32]、‹サチール›という文芸ジャンルが積極的に開拓されていくのは16世紀に入ってからと見てよい。綴り字上、‹i›と‹y›の区別が明確でなかったこの時代には、上記のように‹satyre›とも‹satire›とも記されたが、実は‹le satyre›と‹la satire›とは本来異なった語源に属する語である。17世紀初頭にロンドンで刊行されたコットグレイヴの『仏英辞典』を見ると‹satyre, (m.)›,‹satyre(f.)›の二つの見出し語にわけて意味が記されているが、男性名詞の‹satyre›は、ギリシア語の‹saturos›、ラテン語の‹satyrus›から派生した語で、‹バッカスと一緒になってふざけまわる半獣神サチュロス›をさす。それに対して女性名詞の‹satyre›は、ラテン語の形容詞‹satur›〔堪能した、飽きるほど食したの意〕から派生した名詞‹satura›－この語は帝政期になって‹satira›に変わる－を語源としている[33]。例えば‹satura lanx›といえば、「果物または野菜の混ぜ合せ料理、もしくはケレス〔ローマ神話の豊穣の女神〕にまとめて捧げられた様々な初物」[34]をさし、やがて文学用語に転用されてからは、‹様々なジャンルの要素を取り入れた作品›を意味するようになった。

‹サチール›という語について、長々と講釈をしてくれた、先程の‹作者のいとこなる人物›が、ラブレーを真似たらしい‹塩漬けの牛タンのアントルメ›－「ラブレー」，Ⅰ－21では‹燻製の牛タン›－という比喩で、何を言いたかったのかも、これで分ろうというものだ。

とはいえこの語源説明も絶対的に確かというわけではないらしい。20世紀になって、この語はエトルリア人の言葉から来ているという説が現われたためだが、ともあれ古人は‹ラテン語語源›をみじんも疑わずに受けいれていたのであるから我々も一応それに従って考えてよい、というか、むしろそうすべきであろう。

それに‹le satyre›と‹la satire›を混同したのもあながち16世紀人の無智のせいにするわけにはいかない。当時の理論家たちがホラチウスの『詩法』の一節やドナトゥスの注解書などに影響され、両者を同一に考えてしまったらしいのだ[35]。

我らが『サチール』は、‹三部会›の開催準備で何やらあわただしい気配のただようルーヴル宮の中庭に、縁日の香具師よろしく店を構えた二人の道化師が‹スペインの万能薬(カトリコン)›を売っている光景から始まる[36]。‹カトリコン›の効能を長々と20ヶ条も－いやその倍もあったそうな－記した看板の前で、スピネットを奏でながら、日がな陽気に商売をしているのがスペインの道化師。一方、金詰りのせいか、今やあまり元気がなく、しょぼしょぼとしているのがロレーヌの道化師。

この二人の登場で、我々はいきなり‹コメディア・デラルテ›の世界に誘いこまれたような気分になるのだが、彼らの売る‹カトリコン›は、いかなる‹混ぜもの(satura lanx)›であるのだろう？そして宮殿内部ではどんな‹サチュロス›たちが飛びはねることになるのだろう？それについては稿を改めて見ていくことにしたい。

注

(1) Yves Cazaux, *Henri* Ⅳ, Albin Michel, 1977, t. (Ⅰ), pp. 149-153

(2) J.-H. Mariéjol, *La réforme et la ligue, l'édit de Nantes(1559-1598)*, dans Ernest Lavisse, *Histoire de France illustrée depuis les origines jusqu' à la Révolution*, New York, Ams Press, 1969, (réimpression des éditions 1900-1911), t. (VI), première partie, pp. 238-247

(3) ジョルジュ・リヴェ，二宮・関根共訳，『宗教戦争』，白水社，‹文庫クセジュ›，1968,p.69

(4) Quant aux ‹Seize›, voir surtout : R. Descimon, *Qui étaient les Seize ? Mythes et réalités de la Ligue parisienne(1585-1594)*, Fédération Paris et Ile de France, 1983 ; E. Barnavi / R. Descimon, *La Sainte Ligue, le juge et la potence*, Hachette, 1985

(5) J.-H. Mariéjol, *op. cit.*, in Lavisse t. (Ⅵ), première partie, pp. 298-301

(6) Sur la loi salique et le pouvoir royal, voir : R. Doucet, *Les institutions de la France au XVIe siècle*, éd. A et J. Picard, 1948, t. (Ⅰ), pp. 72-101; G. Zeller, *Les institutions de la France au XVIe siècle*, PUF, 1948, pp. 71-110; F.-J. Baumgartner, *Radical Reactionaries : the political thought of the French catholic League*, Droz, 1976, pp. 53-81

(7) J.-H Mariéjol, *op. cit.*, in Lavisse, t. (Ⅵ) Première Partie, p. 365

(8) *Ibid.*, p. 366

(9) *Ibid.*, p. 367

(10) Y. Cazaux, *op. cit.*, t. (Ⅰ), p. 283

(11) *Ibid.*

(12) Quant aux auteurs de la *Satire Ménippée*, voir: Y. Cazaux, *op. cit.*, t. (Ⅰ), pp. 164-167; *La Satyre Ménippée ou la vertu du catholicon*, selon l'édition princeps de 1594, édition nouvelle avec introduction et éclaircissements par M.Ch.Read, Librairie des Bibliophiles, 1876, ‹introduction›pp. iii-v; Ch. Lénient, *La Satire en France ou la littérature militante au XVIe siècle*, Slatkine reprints, 1970(réimpression de l'édition de 1886), t. (Ⅱ), pp. 125-128 ; Nicolas Rapin, *Œuvres*, édition critique par J.Brunel, Droz, 1982, t. (1), pp. 447-449

(13) Y. Cazaux, *op. cit.*, t. (Ⅰ), p. 166, (passage tiré de *l'Histoire* de J.-A. de Thou)

(14) Sur *P. Pithou*, voir: Louis de Rosanbo, *Pierre Pithou, Biographie*, in *Revue du XVIe*

siècle, vol. (XV), 1928, pp. 279-305 ; Id. , *Pierre Pithou érudit*, in *Revue du XVIe siècle*, vol. (XVI), 1929, pp. 301-330 ; R. Zuber, *Tombeau pour les Pithou*, in *Mélanges V.-L. Saulnier*, Droz, 1984, pp. 331-342 ; George Huppert, *Bourgeois et gentilshommes, la réussite sociale en France au XVIe siècle*, traduit de l'américain par P. Braudel et A. Bonnet, Flammarion, 1983, pp. 255-256, etc.

(15) Y. Cazaux, *op. cit.* , t. (I), p. 165

(16) Florence Poirson, «Les deux avis de l'imprimeur», in *Etudes sur la Satyre Ménippée*, réunies par Frank Lestringant et Daniel Ménager, Droz, 1987, p. 45

(17) Voir, *La Satyre Ménippée*, éd. Ch. Read, ‹deuxieme advis de l'imprimeur›, p. 3 et p. 5

(18) *Ibid.* , ‹premier advis de l'imprimeur›, pp. 1-3

(19) *Ibid.* , p. 7。訳文中の〔 〕の部分の説明は筆者、菅波が書き加えたもの。

(20) *Satyre Ménippée de la vertu du catholicon d'Espagne, et de la tenue des Etats de Paris*, nouvelle édition, imprimée sur celle de 1696, corrigée, & augmentée d'une suite de nouvelles Remarques sur tout l'Ouvrage, pour l'intelligence des endroits les plus difficiles, à Ratisbonne, chez Mathias Kerner, 1699, p. 278, n. (1). N. ラパンが生前に発表した最後の詩は、ピエール・デュ・ピュイの父親クロードに捧げた追悼賦であった。cf., N. Rapin, *Œuvres*, Droz, t. (I), pp. 738-746.

(21) Sur Jamet Mettayer, voir, *L'histoire de l'édition française*, réalisée sous la direction de Henri-Jean Martin et Roger Chartier en collaboration avec Jean-Pierre Viret, Promidis, 1982, t. (I), pp. 342-347 ; p. 356

(22) *Ibid.* , p. 356

(23) *La vertu du Catholicon d'Espagne : Avec un abrégé de la tenue des Estats de Paris convoquez au X de Febvrier 1593 par les chefs de la Ligue*

(24) *La Satyre Ménippée*, éd. Ch. Read, p. 11

(25) *Abbregé et L'Ame des Estatz convoquez à Paris en l'an 1593, le 10 de febvrier*. Voir aussi : A. Armand et M. Driol, ‹Deux états du texte : 1593 et 1594›in *Etudes sur la Satyre Ménippée*, pp. 19-38 ; *La Satyre Ménippée*, éd. Ch. Read, ‹introduction›, pp. XI-XVI

(26) *Etudes sur la Satyre Ménippée*, ‹avant-propos›, p. 7, n. (1)

(27) *La Satyre Ménippée*, éd. Ch. Read, pp. 9-10

(28) *Ibid.* , p. 5

(29) *Ibid.* , p. 26

(30) *Ibid.* , pp. 11-13

(31) Voir : note(12)

(32) R.Aulotte, *Mathurin Régnier, Les Satires*, SEDES, 1983, p. 7

(33) A.Ernout et A.Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Klincksieck, 1967, art. : *Satur*

(34) Jean Bayet, *Littérature latine*, Armand Colin, ‹collection U›, 1965, p. 20, n. (2)

(35) R. Aulotte, *op. cit.* , p. 8

(36) *La Satyre Ménippée*, éd. Ch. Read, pp. 31 - 42, ch. (I), ‹La vertu du catholicon et avant- propos au lecteur zélé›